

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520211

研究課題名(和文) 近代日本の〈民間伝承〉による〈民族文化〉の創成 柳田國男のハイネ受容

研究課題名(英文) The Creation of "Ethnic Culture" through "Folklore" in Modern Japan : The Reception of Heinrich Heine by Yanagita Kunio

研究代表者

林 正子 (HAYASHI, Masako)

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：30198858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、民族至上主義の台頭や民俗学的研究の隆盛など、ドイツの精神文化からの影響を受けた日本における「民族精神」による「国民文化」の創成の諸相を考察することであった。具体的には、学問としての民俗学の隆盛を促した柳田國男におけるハイネ受容の意義を考察するとともに、ドイツの民間伝承に造詣の深かった森鷗外の文学作品の研究を通して、近代日本の自己探究による「民族文化」の文学的表現について考究した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the influence of the German notion "Volksgeist" (national character), the rise of ideas of racial supremacy, and the flourishing of folklore research in Germany on the formation of notions of "kokumin bunka" (national culture) through "minzoku seishin" (racial spirit) in Japan. Specifically, while exploring the significance of the reception of Heinrich Heine by Yanagita Kunio, who promoted the study of folklore as an academic science, it examined literary expressions about "minzoku bunka" (ethnic culture) employed by modern Japan in its search for self through an analysis of the literary works of Mori Ogai, who had a profound knowledge of German folklore.

研究分野：日本近代文学

キーワード：民族文化 民族精神 森鷗外 ドイツ思想文化 柳田國男 ハインリヒ・ハイネ 民間伝承 高山樗牛

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究者は、従来の研究課題として「明治末期から大正期にかけての日本文学におけるドイツ思想・文化受容の意義」、「明治文学の批評概念成立におけるドイツ美学受容の意義」、「近代日本の民族精神による国民文化の系譜——ドイツとの比較を視座として」という一連のテーマのもと、ドイツ思想・文化受容の観点から日本近代文学研究に臨んできた。

近代という時代状況とその思想的要因について、ドイツと日本が多くの共通点や対照性を示していることから、本研究課題についても、ドイツとの影響関係や比較研究によって、近代日本の民族精神論を相対化することがその趣旨であった。

(2) 従来の研究課題において、ドイツと日本における民俗学的研究が第一次世界大戦後に隆盛をきわめる状況や背景について論じることをめざした本研究者は、大日本帝国の安定期に生成した日本民俗学が、近代文明の弊害に対する危機感によって、民間伝承を担う常民としてのアイデンティティの再確認を趣旨として展開されていることを指摘した。

本研究課題では、国民国家統合から帝国主義的膨張を遂げ、近代の超克を提唱し全体主義を構築していった日本とドイツそれぞれの民族精神の追究を比較する際、民間伝承郷土研究という文学テキストの著者としての柳田國男と、「民衆の詩人」ハインリヒ・ハイネの共通性と対照性に想到した。

2. 研究の目的

国民的自覚の高揚する第一次世界大戦後のドイツと日本において、民族のアイデンティティを問う思潮と民俗学の動向とが連関性を有することの具体例として、柳田國男のハイネ受容の意義を考究することが、本研究課題の当初の目的であった。民間伝承を通して郷土研究の方法を開拓し、民族文化の歴史的由来を明らかにするという柳田民俗学の軌跡について、ハイネ受容の意義を考察する過程で、ドイツの民間伝承に造詣の深かった森鷗外の文学作品の分析を通して、近代日本の自己探究による民族文化の文学的表現について考究することが、実質的な研究課題となった。

3. 研究の方法

(1) 柳田國男の「幽冥談」(「新古文林」明治38年9月)とハインリヒ・ハイネの『諸神流竄記』(『流刑の神々』Götter im Exil 1853)の比較研究によって、柳田民俗学のハイネ受容が、近代日本における民俗学の確立を促した要因について考察する。

(2) ドイツ留学体験を通して民族固有の「国民文学」の重要性を説いた森鷗外のドイツ三部作『舞姫』(明治23年1月)・『うたかたの記』(明治23年8月)・『文づかひ』(明治24年1月)を主な題材とし、そのテキスト分析によって、文学作品における近代日本の自己像獲得のプロセスを考察する。

(3) 森鷗外『妄想』(明治44年3月・4月)、高山樗牛「姉崎嘲風に與ふる書」(明治34年6月)、姉崎正治(嘲風)「戦勝と国民的自覚と日本文明の将来」(明治38年5月)などの小説・評論を主な考察対象として、国民国家確立期の日本における民族精神が国民文学を希求する実相について論究する。

4. 研究成果

(1) 国民的自覚高揚期から近代の超克にいたるドイツと日本の民族主義と民俗学的研究の対応関係について明らかにした。

具体的には、ドイツの民族主義に抗したハイネの受容をとおしての近代日本における民族の登場、とくに柳田國男の談話「幽冥談」(「新古文林」明治38年9月)にうかがえるハインリヒ・ハイネの『諸神流竄記』(『流刑の神々』Götter im Exil 1853)受容をとおしての民族認識について論究した。

『流刑の神々』と「幽冥談」の間に設定のズレがあっても、柳田はハイネの主張内容を把握しており、民間伝承の研究が、自国の国民性の特質を研究することになるという発想を柳田がハイネから得ていることなどを明らかにした。

すなわち、民俗学の文学的テキストの考察をとおして、近代日本の自己探究による民族文化創成のプロセスを明らかにするために、民間伝承を巧みに作品化した「民衆の詩人」ハイネの文学から柳田民俗学への影響について検討し、柳田民俗学における民族と民俗の関係性の構築ないしは仮構の実態を浮き彫りにした。

(2) 近代日本において民族文化の重要性を認識した作家・森鷗外が、実際のドイツ留学を通して交渉をもった19世紀ドイツの社会と文化について、「ヴィルヘルム一世とビスマルク体制」、「『小パリ』ライプチヒ

『ファウスト』とパノラマ館』『エルベのフィレンツェ』ドレスデン 王宮体験と軍事演習』『『芸術の都』ミュンヘン ルートヴィヒ二世と原田直次郎』『『欧羅巴の新大都』ベルリン 日本人社会における葛藤』の項目を立てて論じた。また「日本の エートス を求めて 鷗外のドイツ体験による精神の閲歴」については、「祖国愛から まことの我へ』『『妄想』に描かれた精神の閲歴」の節を設けて、鷗外の文学活動におけるドイツ留学体験の意義を明らかにした。

すなわち、ドイツ留学を関した鷗外文学が、日本人の内面性 日本のエートス の考察と個人の人生意義追究とが結びついた精神の閲歴の所産であること、鷗外文学が鷗外自らの 学問的真理の要求に内面的に対決する精神 によって支えられていたように、その現代的意義もまた、異文化との接触を通して生まれる他者理解と自己認識の錬磨

真理の要求に内面的に対決する精神 の重要性を説くその思想に汲み取ることができることを指摘した。

(3) 民俗学的モチーフを題材とすることに卓越し、ドイツ語と日本語で執筆・発表している現代作家、多和田葉子による「エクソフォニー」の定義を参照し、森鷗外の『舞姫』について、創作の原動力や構想力となる作家自身の実人生における言語体験と 書く ことへの意識化、およびその相関性を明らかにした。

「エクソフォニー」とは、「母語の外に出た状態一般」を指し、作家が 異郷 の言語を自家籠籠中のものとすることによって、自己相対化のもとにアイデンティティを形成する過程を表現し、その営為は、言葉の可能性を追究し新しい価値を創造するための、作家による創作上の挑戦の謂いであると理解される。

本研究では、鷗外が「エクソフォニー」に身を置く体験を通して展開した営為そのもの、すなわち、「母語の外」であるドイツ体験を通して自己像を獲得し、その自己像を相対化することで作品化している側面に注目し、異郷 と 故郷 のせめぎ合う 翻訳の場としての作品を考察した。さらに、『舞姫』は、手記を綴ることで自己像を獲得した太田豊太郎を主人公とする小説作品であり、

ドイツ と 日本 という 異郷 と 故郷 の可逆的な内外空間を往来する際の、主人公、ひいては作者＝鷗外の葛藤そのもの、緊張関係そのものの産物として、エクソフォニー小説 と命名することができることを指摘した。

(4) ハインリヒ・ハイネのローレイ伝説を素材とする『うたかたの記』をはじめとする森鷗外のドイツ三部作が、それぞれ独立し

た固有の作品でありながら、三部作を総体として考察する視点の有効性を提示した。

近代日本国家のエリートである三部作の主人公たち(『舞姫』太田豊太郎、『うたかたの記』巨勢、『文づかひ』小林土官)にとつての異郷ドイツにおける 非日常的空間 が、水 のイマージュによって表現されており、その主題と方法を表象する 絵画的性 は、梓小説 というキャンパスに描き出された 水 の形象とイマージュに由来することを指摘した。

また、ドイツ三部作は「絵画小説」としての条件を具えているのみならず、その「絵画小説」における主題・方法・構造によって、鷗外の 自画像 が浮き彫りにされていることを考察した。

すなわち、物語 のトポスとクロノスの設定と連動する、「梓になる物語」と「梓づけられる物語」による梓構成、「物語り状況」の設定、さらに 水 のイマージュの醸成という意匠によって、鷗外ドイツ三部作のイコノロジー(図像解釈学)は、日本人男性主人公の自己像獲得の 挫折 の 物語 による、作家自身の 自画像 創出の 物語 を浮き彫りにしていることを明らかにした。

(5) 森鷗外におけるドイツ体験とドイツ思想受容の意義を再確認するとともに、樗牛と嘲風における 民族精神 論を考察し、鷗外の 民族精神 の文学化の営為との比較考察をおこなった。

さらに、柳田國男の『民間伝承論』などを媒介とすることで、近代日本の 民族精神 による 国民文化 のダイナミズムと連動する、鷗外・樗牛・嘲風における 歴史 に対する 神話 の意義、伝説 の小説化の軌跡についても論究した。

日清戦争後から大正期にかけての日本におけるドイツ思想・文化論が、当時の知識人の意識や国情の実態を根源的に反映していることを論じる過程で、樗牛と嘲風の論説における 民族 の発現を、国家 民族 という単位での個人の自覚による 文明 の隆盛の提唱としてとらえ、樗牛と嘲風の論説を媒介とすることで、鷗外における 民族精神 の文学化の意義を考究した。

すなわち、民族精神 の追究と 国民文化 についての認識の深化が、鷗外文学における 神話 と 歴史 の分離、伝説 の文学化となって展開されていることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

林 正子 「『学問的真理』の今日的価値

と社会的意義 鷗外研究 豊熟 の一年」
日本近代文学 査読無 第 90 集 2014 年
221～227 頁

〔学会発表〕(計 3 件)

林 正子 「近代日本の 民族精神 と 国
民文化 鷗外・樽牛・嘲風におけるドイ
ツ思想の受容」 日本比較文学会九州大会
2014 年 7 月 5 日 福岡工業大学(福岡県、福
岡市)

林 正子 「鷗外による 民族精神 と 国
民文化 の追究— 民族 と 民俗 の関
係性を視座として」 日本近代文学会東海支
部第 46 回研究発表会 2013 年 3 月 30 日 愛
知淑徳大学(愛知県、名古屋市)

林 正子 「森鷗外の 異郷 体験と 自
己像 獲得」 日本比較文学会第 33 回中部
大会シンポジウム 2012 年 5 月 12 日 名古
屋大学(愛知県、名古屋市)

〔図書〕(計 3 件)

鷗外研究会 編 双文社出版 『森鷗外と
美術』 2014 年 全 324 頁

林 正子 執筆担当 「森鷗外ドイツ三部作
のイコノロジー— 「絵画小説」の方法に
よる作家の 自画像 創出」 91～109 頁

清田文武 編 勉誠出版 『森鷗外『舞姫』
を読む』 2013 年 全 372 頁

林 正子 執筆担当 「エクソフォニー小
説 としての『舞姫』— 実体験の 翻訳
という創作」 32～57 頁

神田由美子・高橋龍夫 編 翰林書房
『渡航する作家たち』 2012 年 全 223 頁

林 正子 執筆担当 「森鷗外 日本の エ
ートス を求めて ドイツ体験による精神の
閲歴」 9～20 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 正子 (HAYASHI, Masako)
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号: 30198858